

隠元書風源流説に関する再検討

劉 作 勝

はじめに

黄檗禅林の書について日本で行われている研究のほとんどが初代隠元禅師の来日時を始まりとし、黄檗禅林の書が日本書道史上に及ぼした影響についての研究が主体となっている。隠元来日以前の部分については様々な理由によりなお空白に近い状態である。

彼は来日した時、既に六十三歳であり、その書風は中国においてすでに形成されていたと考えられる。その書風が誰からの影響を受けているかについて、一般書道史にはいくつかの通説が見える。代表的なものを挙げると、

1、隠元に由来説

① 「開祖隠元の渾厚雄偉の書風はその師費隱に由来するものと思われる……」

『書道芸術』別巻四（中央公論社、一九七三年四月）

『中田勇次郎著作集』第二卷「江戸時代の書道」（二玄社）

② 「わが国黄檗宗の初代隠元隆琦の書風は、その師費隱のものであり

……」

（中島皓象）

『墨』第六十三号「黄檗墨跡の源流」

（芸術新聞社、一九八六年）

2、「宋四家」の蔡襄に由来する説

① 「隠元の書は宋の蔡襄を学んだというが、その根底に禅者の気迫を加味して、まことに力強い書を書いている」

（小松茂美）

『唐様書道』（中央公論社）

② 「隠元の書は宋の蔡襄を学んだという」

（林 雪光）

『書道全集22（日本9）』（平凡社、一九五九年）

③ 「隠元は宋の蔡襄や董其昌を学んだと言われる雄渾な書風を……」

（島谷弘幸）

『唐様の書』（東京国立博物館、一九九六年）

しかしながら、これらの説はいずれも漠然としており、たとえ特定の書家が挙げられていても具体的な根拠が示されておらず、実証には至っていない。そこで筆者は文献の調査と作品の分析を通して、来日以前彼が中国にいた時期の経歴と、当時における各地書壇の状況に着目し、彼の書風成立の契機の空白部分を明らかにしたい。

本考察では、彼の来日前の早期作品を中心に、筆使い、文字造形などの特徴の分析を通して、彼の行草書の基盤は明代中期の呉派書家文徵明の書法であることを確認する。それに基づき、旧来の師承説への否定論を唱えたい。

第一節 隠元行草書の基盤——文徵明書風

一、作品概要

遺存する隠元の墨跡の種類、数量は膨大なものである。『隠元全集』^①彼の語録、詩偈集についてのみ調べても、題讚約二百三十（他に自讚百）、詩偈約三千七百五十首（他に歌約七十）が数えられ、その大部分、題讚約二百三十のうち百八十、詩偈約三千百五十のうち三千百首は日本において作られたものである。それらは全て筆で書かれていたと思われ、黄檗宗関係の寺院を中心として、諸檀越に分散している。また筆者のこれまでの調査によれば、来日以前の題讚、詩偈七百点のうち実作例を五点確認でき、いずれも日本にある。（図1〜5参照）

- 1、源 流（付木庵）（二六五二年）
（京都萬福寺蔵）
- 2、第一請啓復書（二六五二年）
（京都東林院蔵）
- 3、法蓮東行巻（二六五三年）
（京都萬福寺蔵）
（常滑市龍雲寺蔵）^②
- 4、天童密師翁讚（二六五三年）
（京都萬福寺蔵）
- 5、列祖図序（二六五四年）
（京都萬福寺蔵）

現存する隠元来日前の墨跡が極端に少ない理由は、まず中国王朝の交替における戦禍が日本と比較にならないほど甚だしく、残存する機会が少なかつたこと。次に中国では古来より官吏・文人の書法が尊ばれ、一般的に禅僧の墨跡が尊重されなかつたということが挙げられる。また、隠元の墨跡が最も多く残されてしかるべき福建黄檗山萬福寺が一九四九年火災に遭い、寺蔵資料の全てを失うという決定的な要因もあつた。そのため現存する来日前の作品は隠元早期書風の探求にとって極めて重要

な資料である。

五点の墨跡は、年代は近いものの、内容によって風格に多少の違いが見られる。しかしながら、全体から受ける印象派は明の中期の呉派の書風に近く、字形と筆使いから呉派書家文徵明の書の特徴と共通するところが多く見受けられる。

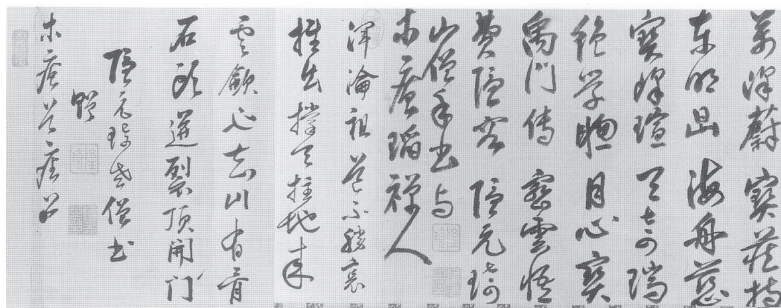


図1 「源流・付木庵」(部分 萬寿院蔵)

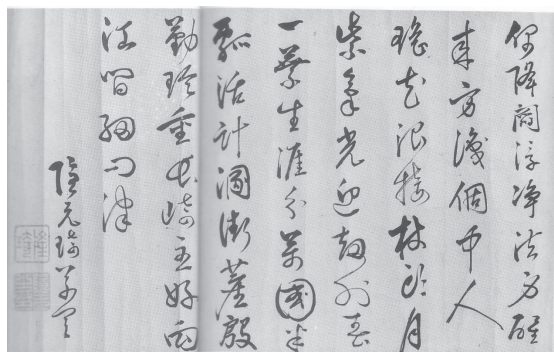


図2 「第一請啓復書」(部分 萬福寺蔵)

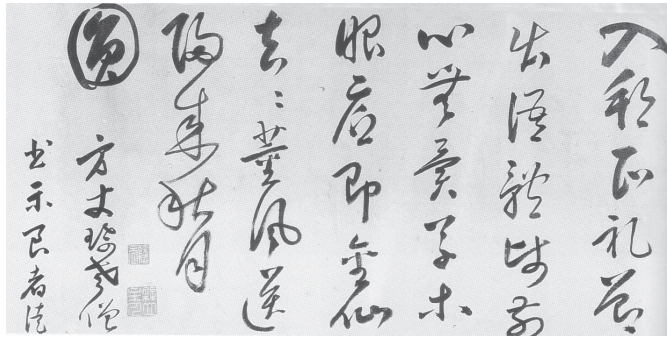


図3 「法運東行」(部分 東林院藏)

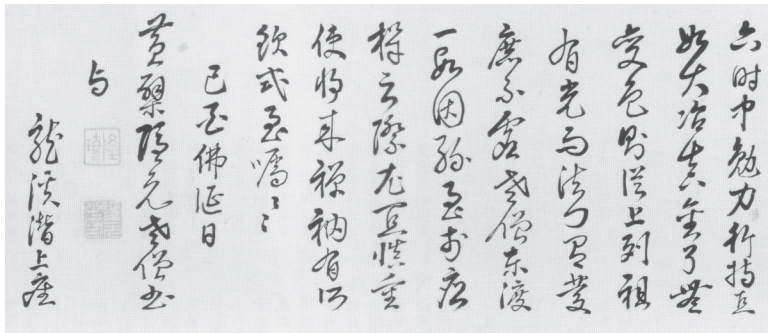


図4 「天童密師翁讚」(部分 常滑市龍雲寺藏)

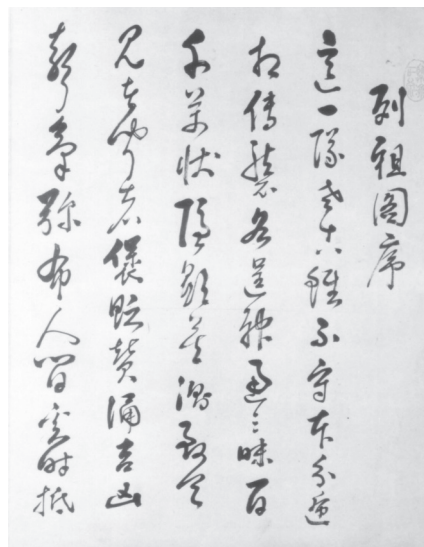


図5 「列祖図序」(部分 萬福寺藏)

二、呉派の書と文徵明

江蘇省と浙江省とは、史上「江浙」と呼ばれ、明の中葉から清にかけて最も繁栄し、豊かな経済基盤の上に栄えし、文芸と宗教が発達した。

書においては当時の言葉に「天下の法書、皆呉中に帰す」といわれるほど隆盛を誇っていた。その呉中(現在の蘇州市)では、祝允明(一四六〇—一五二六)・文徵明(一四七〇—一五二八)・王寵(一四九四—一五三三)らが相次いで輩出し、「呉中の三大家」と称された。

明の王世貞は「呉中の三大家は、祝京兆允明が最たり、文待詔徵明と王貢士寵は之に次ぐ」と評価していた。祝允明は草書で知られ、晩年になると放縦な狂草を好み大いにもてはやされた。文徵明は祝允明と明代第一の評価を二分した大家で、王羲之書風を継承し、詩・書・画ともに優れている。王寵は徵明の弟子でありながら草書を得意とし、字裏空間には自己の風格が明らかに現れている。三十九歳で早世したため残る作

品は少なかつた。祝允明が三人の中で一流と認められながら、『明史』にも記録されるように酒色を好んで蘇州の放蕩児と称されたのに対し、文徵明は温厚誠実な人柄が「高土の雅潔な風格を追求することに重きを置き、あたかも両袖の清風、一塵も染まらず」と評される。そうした彼を慕って蘇州一带には多くの文人が集まった。隠元語録の中には「師者表也、表正則正、表邪則邪、吾人豈不挾善而從之」の句があり、師を選択する基準が伺われる。文徵明の書を学ぼうとした理由も隠元が文徵明の人柄とその書の正統性を重んじたからであると推察できる。

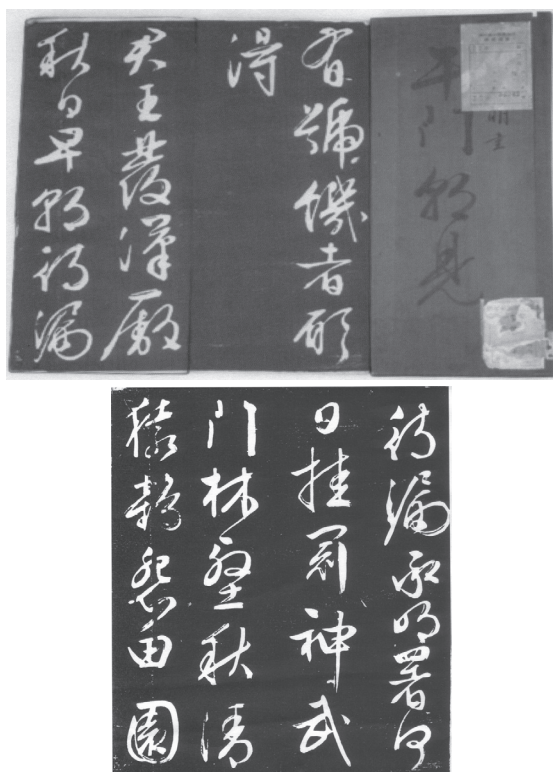
明代には書の勉強の手本は真蹟を第一とし、模本がこれに次ぐ。真蹟や模本を木や石に刻し、その墨拓を鑑賞し、模写するにふさわしく装丁したものを法帖と呼ぶ。

文徵明の書を最も早期に刻した法帖「停雲館帖」は、明代法帖の中で最も著名なものである。明の王世貞「弇州山人統稿・停雲館帖十跋」によって嘉靖十六年（一五三七）正月から同三十九年（一五六〇）に至るまで、二十四年を費やして十二巻本が完成した。これは極めて貴重な鑑賞用の集帖であるため、一般人が入手できる価格ではなかつた。単帖としては文徵明の曾孫にあたる文震亨が「停雲館帖」中の一部分と「草書千字文」「午門朝見帖」を刻し、萬曆四十年に上梓した。

筆者は隠元の現在来日前の墨跡中の中、最も早期の二点「第一請啓復書」と「法運東行」の書風と文徵明の法帖とを照らし合わせた結果、文氏の「午門朝見帖」(図6参照)の特徴に最も近いと判断する。

「午門朝見帖」の巻末には、嘉靖庚子仲春（一五四〇）とあり、文氏七十歳の作品であることがわかる。この作品は王羲之の書風を中心に、趙孟頫の影響も認められる。また書体には行書と草書との混合が見ら

図6 文徵明「午門朝見帖」上、帖首部分 下、部分（三徑堂藏）



れ、偏旁部首はみな規格に適合しており、転折の部分は円滑な筆様を示す。行草書体の学習には適切な手本といえることができる。

三、両者の関連部分の分析

一般では、二人書家の作品の関連性についての判断方法は、用筆（筆使い）、結体（文字造形）、章法（文字布置、全体構成）の三視点から分析していく。ここで三つの図表を通して隠元の「第一請啓復書」と、文徵明の「午門朝見帖」との関連について検証を行った。

その結果、図7に示すように隠元の「第一請啓復書」中の筆使い、文

図7 「三視点」による両者書法の比較

文字布置		筆使い	
特徴：単字不連		特徴：露鋒平入	
文徵明	隠元	文徵明	隠元
			
文字造形			
特徴：右旋円形			
文徵明	隠元	文徵明	隠元
			

隠元書風源流説に関する再検討（劉）

字造形、文字布置は文徵明の「午門朝見帖」の特徴と極めて近い関係にあることが確認できる。

書は文字を素材にして創作するものである。したがって、その文字に対する最初の筆使いや造形は、時間の経過とともに書風がいかに変化しても、その基本造形はほとんど変わることがない。隠元と文徵明両者の作品を比較したところ、特に文字造形の相似が見て取れる。（図8、9参照）このことから、隠元来日前の書風は文徵明の書法であったと言えるよう。

四、初学時期の推測

隠元は九歳で初めて学に就くが、貧困のため一年を過ぎたころ学を廃し、耕樵の業を習わなければならないようになった。彼がいつごろから書の勉強を始めたのか、残された数少ない記録の一つである彼の詩の中に

三載学成書 書成楽有餘
 縦横皆中節 点画契如真
 海国誰為侶 文房獨善心
 心花開夢筆 一氣貫雲衢

（『隠元和尚雲濤三集』示元春信士）

の句があり、そこから三年を費やして書を習得したことが窺い知られる。

中国では「三」は単に「三つ」という意味に限らず、「いくつもの」の意を表わす数字である。また禅僧の場合「一住三年」という修行期間の言い方もあるので、ここでは一つの書風を学ぶには最低でも三年位は

図8

愛知学院大学文学部 紀要 第三九号
「第一請啓復書」の文字造形美の分析

午門朝見帖	第一請啓復書 及び 法運東行	
	 	<p>一 頭大脚小の造型（逆三角形） 点画間の余白が生き気宇壮大。</p>
	 	<p>二 偏と旁の間を広くする造型 ふところが広く雄大で安定感がある。</p>
	 	<p>三 頭小脚大の造型 重量感と安定感が出る。</p>
	 	<p>四 右旋回の多様な円運動による造型</p>

午門朝見帖	第一請啓復書 及び 法運東行		
			<p>五 簡素な造型</p> <p>実画のみで構成し、簡素美の極致を示す。</p>
			<p>六 連続した線による造型</p> <p>筆勢と流動美が出る。</p>
			<p>七 収筆内旋造型</p> <p>沈着痛快、さっぱりした感じ。</p>
			<p>八 主画を強調伸展させた造型</p> <p>爽快感と行の貫通表現に効果的。</p>

図9 「午門朝見帖」と「第一請啓復書」の同様字の比較

愛知学院大学文学部 紀要 第三九号

隠元	文徵明	隠元	文徵明
			
			
			
			
			

かかるという意味に解し、実際に三年間であったと考えて分析を進める。

隠元は萬曆四十年（一六一二）から父を捜すため、初めて旅の途につき、同四十三年（一六一五）に帰郷、その間三年にわたり滞在したのが江浙地域であった。⁸⁾

前にも述べたとおり、その頃文徵明の法帖「午門朝見帖」などが彼の曾孫文震亨の手で出版され、書を学ぶ者の人気を集めた。同時期、蘇州周辺にいた隠元は呉派文芸の薫陶を受け、文徵明の書風に興味を持ち、滞在中の三年間に書を勉強したのではなからうか。そう考えれば、前出の詩に示される「学書三年」とはこの時期のことを指していると考えたい。

また、隠元の呉派文芸への傾倒は、書以外の分野にも見られる。黄檗文化の中で煎茶道の趣味は、早くから専門家に呉派文人茶風の流れを汲むと指摘された。⁹⁾ 隠元の詩「雪中煮茶五首」¹⁰⁾の中に文徵明の「茶詩」を模倣する部分があり、その関連説の裏付けとなる。また、京都萬福寺には文徵明の扇面山水画が、黄檗宗の祥雲山慶瑞寺には、隠元が将来した文徵明の絵画「秋夜讀書圖」一巻と文徵明の師沈周・呉寛の墨跡が残されている。このように隠元が住んだ寺々に文徵明の法帖が存在し、いつでも閲覧できる環境にあったことに加えて、諸檀越文人との交流においても文徵明の真蹟に接する機会が多く、隠元の書の学習において文徵明が与えた影響は大きいと考えられる。¹¹⁾

第二節 隠元書風源流説についての検討

一、費隱に由来する説

隠元の墨跡には草書が大半を占めている。彼の草書は文徵明の行草書を基礎にして、黄道周と張瑞図の連綿草書を取り入れてはいるものの、黄、張のような激しい表現はせず、読みやすく穏やかな筆使いには、洗練された文人の氣息が横溢している。一方の費隱も草書を得意するが、隠元とは対照的な狂草書風を持つ大字を書く。彼の墨跡を見ると腕全体を廻し、筆の腹が紙に食い込むようなかすれの多い線が走っている。

ここで前文に挙げた隠元書風の「師承」についていくつかの説をもう一度検討してみたい。小松茂美氏は隠元の書は「蔡襄を学んだというが……」としているが、どこから出た説であるかは説明されていない。また中田勇次郎氏の「費隱に由来する」、中島皓象氏の「費隱のもの」とする説は、文字通りに解釈すれば、隠元が費隱の書風をそのまま継承したと結論するものであり、この説の支持者・提唱者は両氏以外にも多く存在する。

しかし、費隱の書の根本的特徴を理解すれば、隠元との間にあった宗教的師承関係が、書法においても成立するものではないことがわかる。費隱は明朝滅亡の際、乱入した賊兵に右腕を斬られ左手で書くようになったため¹²⁾起筆するときに期待する筆の動きと、実際の動きとの間に利き腕でないが故のズレが生じ、葛藤が見られる。安定感をつけるため起筆は「トーン」という具合に強く唐突に入れ、収筆は「スー」とすばやく行う。隠元の起筆は文徵明の「露鋒平入」が特徴で

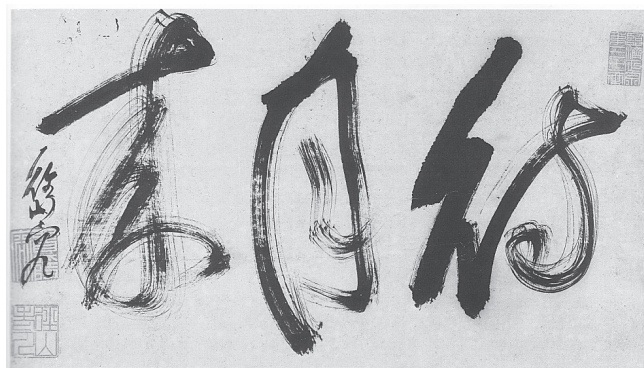


图10 右、「費隱像」(萬福寺藏)
左、費隱墨蹟「待月来」(萬福寺藏)

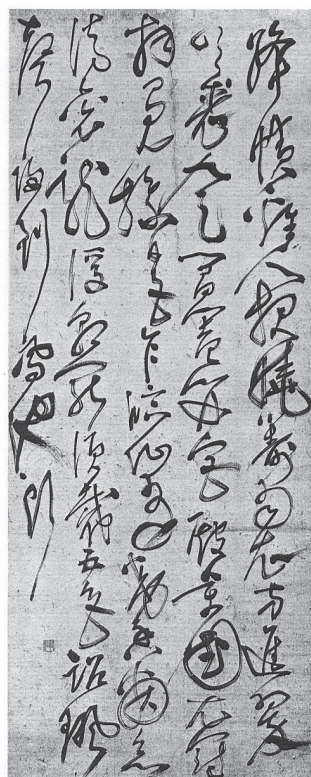
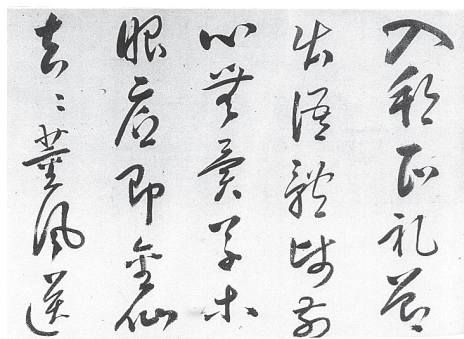
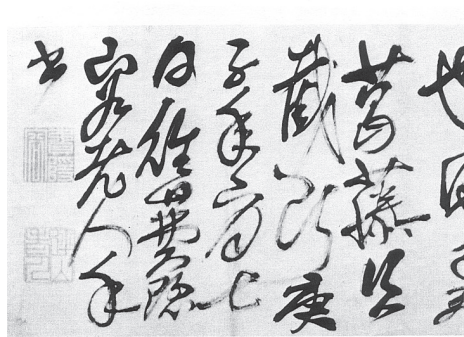
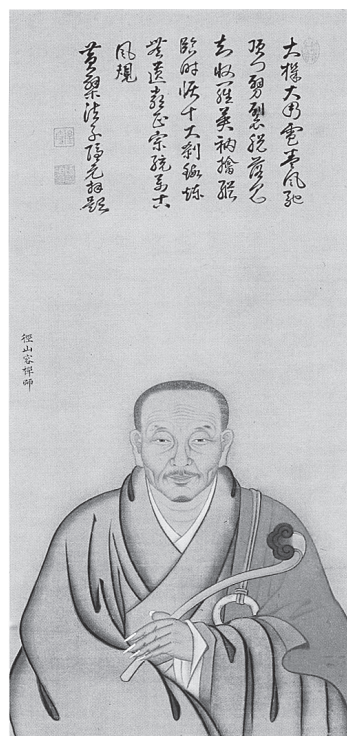


图11 右、張弼「草書王維詩」(部分 米国プリンストン大学付属美術館藏)
左、費隱「開示卷語」(部分 萬福寺藏)
左下、隱元「法運東行」(部分 萬福寺藏)

ある。彼が器用な右手で、費隱の左手で書いた字形を追ったとするならば、不自然さを感じたに違いない。また、字形において、費隱の書は明の書家張弼¹³⁾の狂草書風に属し、著しく右上がりの特徴を持っており、隠元の左右均衡を保つ草書とは対照的である。(図11参照) 筆者は両者の書が、筆使い、字形、気韻などにおいて全く違った風格を示していることから、隠元が費隱の書風を直接継承するような師承関係ないと判断する。確かに事実上費隱は隠元の法嗣を受けたか、実質的に隠元が費隱のもとで修業する期間が半年にも満たなかった。それほど短時間で隠元が書法を習得することができる可能性はほとんどありえないと考えられる。下の略年表を参考すれば隠元と費隱が接触できた時間がよくわかる。

二、「宋四家」蔡襄に由来する説

京都黄檗山萬福寺には隠元が所有した『宋四家字帖』がある、(図12参照) それについて、

「隠元は、常日頃、『四家字帖』を身邊に置いていた。蘇軾の落花詩、黄庭堅の梨花詩、蔡襄の梅花詩、米芾の瀟湘八景図詩の萬曆刊本があるが、座右に置いていたのである」 (林雪光)

『黄檗三筆』黄檗山萬福寺・全日本煎茶道連盟、一九八九年) と言う論述がある。「宋四家」とは、蘇軾(一〇三六—一一〇二)、黄庭堅(一〇四五—一一〇五)、米芾(一〇五一—一一〇七)、蔡襄(一一〇一—一一〇六)の北宋書壇を代表する四人の書家である。蘇、黄、米、蔡四家の書風はそれぞれ違う個性を強く呈しており、四家ともに学ぶのは不可能だと考えられる。隠元が「宋四家」中の誰の書を学んだかを推

隠元書風源流説に関する再検討(劉)

測するならば、蘇、黄、米三家と比較して蔡襄の書風が隠元の書風に近いことから、蔡襄を挙げるのが妥当であると思われる。黄檗宗本山に保存されている隠元所有のこの「宋四家帖」は隠元書風源流の問題について調査する研究者にとって重要な物証で、その中の一人の書を学んだことは容易に想像することができる。そのことから萬福寺文華殿主管の林雪光氏の上記のように論述したと思われる、その論述と根拠に、小松茂美氏、島谷弘幸氏らは「隠元の書は蔡襄を学んだ」という結論を下したと思われる。

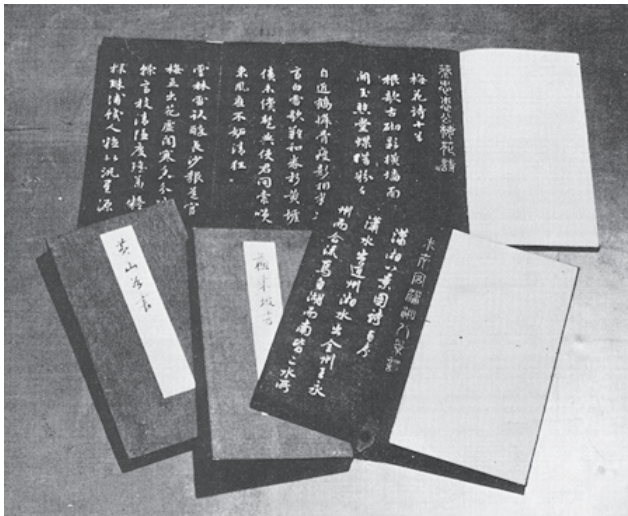


図12 「宋四家字帖」(萬福寺蔵)

では隠元は蔡襄の法帖を含む「宋四家帖」をいつ頃入手し、習い始めたのであろうか。一九九五年三月、中華全国図書館文献縮微復制中心より『旅日高僧隠元中土来往書信集』が出版され、本山萬福寺に秘蔵されている隠元所収の書信一一七通が公開された。その中の一六五五年六月隠元の師である費隠から隠元に宛てられた一通の複書に注目したい。

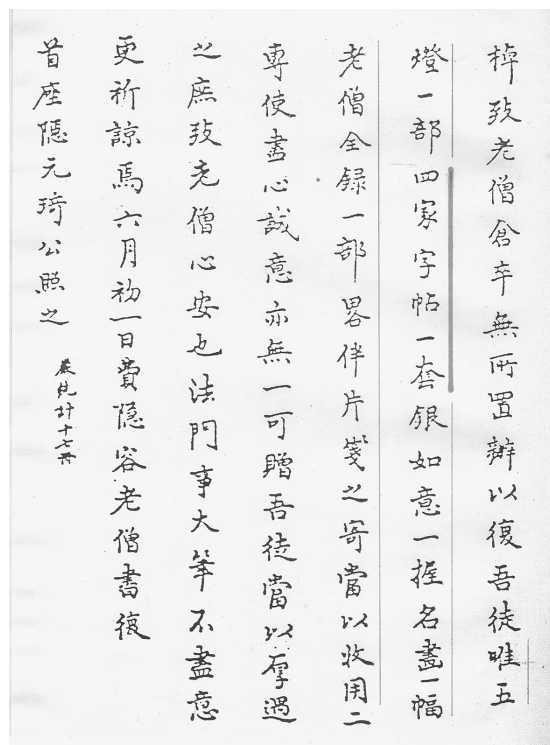
……老僧倉卒、無所置辦以復吾徒。唯五燈一部、四家帖一套、銀如意一握、名画一幅、老僧全錄一部、略伴片箋之寄、當以收用。

(区点筆者注) (図13参照)

一六五五年正月(隠元来日の翌年)、隠元の弟子古石が帰国し、江南常熟(今の江蘇省常熟市)の維摩寺を訪れ費隠に面会した。その際費隠は複書とともに数点の物を古石に託して遠い日本にいる隠元に送ることにした。前に示した複書を見れば、その中に『宋四家帖』が入っていたことがわかる。また、『隠元全集』第六巻中の『隠元和尚雲濤二集』(扶桑A・B)には、「閩四家帖 蘇東坡、黄山谷、蔡君謨、米元章」の詩があり、時間的にはちようど古石が日本に戻ってきた頃書かれたものであると判断される。よって、「宋四家帖」が隠元の手に渡ったのは一六五五年六月以後、隠元六十四歳の時であったと考えられる。

費隠はなぜ隠元に「宋四家帖」を送ったのか複書の中に明記してない。隠元来日前、六十三歳までの書風は文徵明書風の影響のもとですでに形成されていたので、六十四歳から蔡襄書風に変える必要はないと考えられる。また、文徵明書法の文字造形は隠元晩年の書風まで影響しており、途中で蔡襄書風に変わった形跡は墨蹟の中にも見当たらない。隠元来日して七年後の一六七一年、費隠が中国で没した。費隠から譲り受けた「四家字帖」は隠元にとって亡師の形見のような存在で、常に身近に

図13 「費隠が隠元宛ての書簡」(部分) 『旅日高僧隠元中土来往書信集』より
一九九五年三月、中華全国図書館文献縮微復制中心出版



置いていたであろうと考えられる。蘇東坡、黃庭堅、米芾、蔡襄の「宋四家」は文人書家の代表として宋代以来各時代の文人、書家にとって、憧れの存在である。よって「宋四家」書風の隠元への影響を完全に否定することはできないが、「隠元の書は蔡襄を学んだ」という結論には至らないと考える。

おわりに

以上が旧来の隠元書風源流諸説に対する筆者の再検討である。書家の

書風の源流問題の開明はその書家に関する研究の第一歩かつ重要な課題である。そのために、まず作品の文字造形、用筆特徴、全体構成などの分析を行い、その上に、関連文献の調査を加え、総合的に判断して、結論を下すべきだと考える。今までの研究のように、具体的な論証を示さず、「師資相承」の観点から隠元の書はその師費隱のものである、或いは所有した字帖から蔡襄を学んだというそれぞれの判断は少し不十分であると考えられる。

注

- (1) 平久保章『新纂校訂隠元全集』（以後『全集』と略す）開明書院、一九七九年十月。
- (2) 『隠元禪師統録』『全集』（三卷一五五頁）「天童密師翁」によればこの墨蹟は常滑市龍雲寺蔵とされ、年譜によれば永暦七年六十二歳の年に書かれた。筆者はこの墨蹟について調査中であるため、ここでは参考文献の書名のみを挙げ、写真は掲載しない。
- (3) 陳梗橋「文徵明の書芸術」『書法』（一九八七年第一期）、上海書画出版社。
- (4) 「復独明禪人」『黄檗和尚扶桑語録』『全集』（四卷）、二〇二四頁。
- (5) 「明代法帖考証」『中国現代書法論文選集』上海書画出版、一九八二年、六一九頁。
- (6) 「午門朝見帖」墨拓折帖、横六九六cm、縦三三・五cm、計四十八折四三六字、三徑堂蔵。
- (7) 『普照国師年譜』『全集』（付録卷）、五〇九七頁。
- (8) 陳水源『隠元禪師與萬福寺』台湾・辰星出版、二〇〇一年十二月、三九四―三九六頁。
- (9) 大槻幹郎「黄檗山における文雅と禪と茶」『煎茶文化考・文人茶の系譜』思文閣出版、二〇〇四年二月、十六頁。
- (10) 同右一九〇頁、文徵明の「茶詩」部分は『文徵明集』（上下）、上海古籍

隠元書風源流説に関する再検討（劉）

出版社、一九八七年。

- (11) 慶瑞寺蔵品は「龍溪禪師三百年忌并慶瑞寺客殿落成記念」『祥雲山慶瑞寺』祥雲山慶瑞寺、二〇〇〇年四月、萬福寺蔵品は「黄檗僧帶來の明書」『墨美』（一〇五号）、墨美社、一九七三年により摘録。
- (12) 西村南岳「黄檗高僧の墨蹟を探索して」『墨美』（第一〇五号）、墨美社、一九六一年三月、八頁。
- (13) 張弼（一四二五―一八七）東海と号した。華亭（上海市松江）の人、草書を得意とし、最も狂草で知られる。明代中期以後の草書の発展に先駆的役割を果たした。